

弘化4年の善光寺大地震と裾花川流域の被害

弘化4年3月24日夜亥の刻（1847年5月8日後10時ごろ）、信濃から越後にかけて激しい地震が起きた。震央は長野市の北（138.2° E, 36.7° N）、マグニチュードは7.4と推定されている。最大の被害地が善光寺町（現長野市）であったので、俗に善光寺大地震と呼ばれている。

この地震では、震動による建物の倒壊などの一次災害に加えて、火災、山崩れや地滑り、洪水などの二次災害が重なって被害をより大きくした。善光寺、稲荷山、信州新町、飯山は火災になり、水内、更科両郡の西方山地は山崩れや地滑り、そして善光寺平は洪水による被害を受けた。



善光寺町は、地震直後に発生した火災で横沢町を除いてほとんど焼きつくされ、3日後の26日になってようやく鎮火した。善光寺では前立本尊の御開帳中で、地震当夜、町内には7～8000人の旅宿人がいた。このため犠牲者が多く出た。被害は、焼失約2,200戸、潰家約160戸、潰れずに残った家は140戸にすぎず、圧死者、焼死者は2,400人に達した。

所領のほとんどが激震地帯に入る松代藩でも被害が大きかった。城下町の松代では、全壊214戸、半壊391戸、大破768戸、圧死者32人、けが人27人の被害が出た。領内在方では住宅全壊9,327戸、半壊2,802戸、大破3,120戸、圧死者2万1,000人余、けが人1,200人余を数えた。山崩れや地滑りは4万1,000ヵ所余、田畑の損耗高は領内約200ヵ村12万石のうち、151ヵ村7万1000石余に達し、激震地の陣場平山から虫倉山の周辺村々にかけて、被害が際立った。

地震による山崩れは、犀川をはじめ中小の河川を埋めてせき止め、各地に水害をもたらした。とりわけ大きかったのは、更級郡山平林村、安庭村にまたがる岩倉山（虚空蔵山）の崩落で、19日間にわたって犀川をせき止めた。このため上流は大湖と化し、更科・水内・筑摩3郡にかけて数10ヵ

村が水没した。4月13日、せき止められた所が決壊し、膨大な湖水が一気に押し出した。激流は川中島一帯を襲い、千曲川に流れ落ち、下流の高井・水内両郡の川沿いの村々にも大きな被害を与えた。14日明け方、ようやく水が引き始めた。この氾濫で松代領内では本・新田高4万8,000石余、80ヵ村が流失した。藩ではせき止め箇所の決壊をノロシや早鐘で知らせるとともに、領民に避難勧告をするなど防災体制を取っていたので、大洪水の割には、犠牲者は20人余と少なかった。



さて、この絵図は、付記「時に弘化四丁未年三月二十四日夜大地震につき、日影村地内、字麻苧久保抜け崩れ、煤花川水湛え、鬼無里村のうち、川浦村入水仕り候。六月三日、道橋方御見分の上、絵図面御認めあそばされ候写し」にみられるように、6月3日被害調査のために茂菅通（裾花川流域の村）の村々を巡視した松代藩役人が作成した絵図面を、鬼無里村・日影村の村役人が後世のために写し置いたものである。

裾花川のせき止めは数ヶ所で発生したが、日影村麻苧久保で虫倉山が崩落し、3ヵ月余にわたって裾花川をせき止めたのが最大である。崩落した土は高さ48^尺に堆積し、上流約2.2^町、幅約440^尺が湖となった。鬼無里村では川浦の民家9戸と耕地が水没した。7月20日に一部が決壊し、中御所村など下流の村々の堤防を押し破り、水害をもたらした。その後せき止め箇所の掘割りを行って、月末に通水させた。

このほかに鬼無里村の親沢や戸隠村下祖山の菖蒲沢の土石流が押し出し、裾花川をせき止めた。菖蒲沢の土石流では、民家13戸、1ヵ寺が埋没した。小鍋村では、高さ約6^尺の崩土が22.3^町にわたって裾花川をせき止めたが、村の人夫で掘割りを行い、3月28日には通水させた。これらはいずれも被害は少なかった。

岡澤由往／長野市誌編さん専門委員



地震災害測量絵図面／裾花川流域（鬼無里村歴史民俗資料館蔵）

